

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	中道 徹
論文担当者	主査 木島 貴志
	副査 小柴 賢洋
	副査 越久 仁敬
学位論文名	Quality of Life and Lung Function after Pleurectomy/Decortication for Malignant Pleural Mesothelioma (悪性胸膜中皮腫に対する胸膜切除/肺剥皮術後の QOL、呼吸機能の変化)
<p>悪性胸膜中皮腫 (MPM) の治療において胸膜切除/肺剥皮術 (P/D) は大きな役割を担っているが、P/D の QOL に与える影響についての報告は決して多くない。P/D は生命予後に寄与する可能性があるが、広範な胸膜の剥離および剥皮に伴いその手術侵襲は通常の胸部手術に比べて大きい。</p> <p>申請者は、P/D が術後 QOL の面でも許容できる術式か評価するため、P/D 術後の QOL 変化について後方視的に検討した。2014 年 6 月～2018 年 6 月に P/D を施行した 65 症例に SF-36 QOL 質問紙に記入を依頼し、術前、術後 3, 6, 12 カ月の 4 ポイント全てで回答を得られた 45 症例について解析した。SF-36 は 36 問からなる質問紙法で、QOL を 8 項目 (身体的 4 項目、精神的 4 項目) に分けて解析できる。併せて、呼吸機能や臨床情報との関係性についても検討した。</p> <p>Physical function と role physical は術後 3 カ月で低下し、12 カ月後も改善しなかった。Body pain は術後 3 カ月で低下した後若干改善したものの、12 カ月後も術前よりは有意に低いままであった。General health perceptions、vitality、social function は術後 3 カ月で一旦低下するも、術前レベルまで改善した。Role emotional は術後低下し、6 カ月後に一旦改善するも 12 カ月後には再度低下した。Mental health は術後にむしろ術前より改善した。また、横隔膜再建は術後 QOL 低下のリスク因子であることが分かった。</p> <p>4 ポイント全てで呼吸機能検査が施行できた 39 症例の解析では、術後 FVC と FEV1 は術前の 60% 程度に低下し、その後も改善しなかった。また、右側手術の方が呼吸機能の低下が大きかった。身体的 QOL は術後低下した後 12 カ月後には若干改善する傾向にあり、呼吸機能検査だけでは QOL の評価に限界があることも示唆された。一方、精神的 QOL は一度低下した後術前レベルまで改善する項目が多かった。PS 良好な早期症例では、P/D はむしろ QOL を低下させることが示唆された。</p> <p>本研究の成果は、早期症例に対する P/D のベネフィット評価において、QOL を維持した健康寿命延長が重要であるという観点から、術後の QOL についても考慮する必要があり、SF-36 質問紙法などによる QOL 評価を活用し、呼吸機能検査などにとどまらない多面的な術後フォローが重要であることを示した点で、臨床的に有意義な研究であり、学位授与に値するものと判断した。</p>	